

分類名 [病害虫]

11 県内で初めて確認された園芸作物の新病害虫
(平成8年～平成9年)

園芸試験場

1) 取り上げた理由

宮城県内の野菜4作物(トマト, ハクサイ, シソおよびモロヘイヤ: 2病害)に原因不明の5種類の病害が発生した。病原菌の同定を行ったところいずれも, 県内での発生が未確認の病害(既に国内で報告済み)であったため, 参考資料とする。

2) 参考資料

野菜に発生した新病害

	確認日	病名	病原菌	
a	H9/ 6	トマト根腐萎凋病 (旧名称: レースJ3)	糸状菌	<i>Fusarium oxysporum</i> f. sp. <i>radicis-licopersicis</i>
b	H8/12	ハクサイ輪紋病	糸状菌	<i>Asteromella brassicae</i>
c	H9/ 9	シソ斑点病	糸状菌	<i>Cercospora cassiicola</i>
d	H9/ 7	モロヘイヤ黒星病	糸状菌	<i>Cercospora corchori</i>
e	H9/ 4	モロヘイヤ葉ぶくれ病(仮称) *	糸状菌	<i>Taphridium</i> sp.

※ 注意事項

新規病害を命名する場合, 学会, 研究会等に発表し, 論文または講演要旨として掲載後に日本植物病理学会「日本有用植物病名委員会」に申請する。審査後に日本植物病理学会報の病名目録に掲載されるまでは, 正式に病名として認知されないため仮称として取り扱われる。

3) 対象地域等

県下一円

4) 特に留意すべき事項

表-1を参照

5) 背景となった主要な試験研究

(1) 研究機関及び担当部科名 園芸試験場 環境部 病害虫科

(2) 研究課題名及び研究期間 地域農業改良普及センター及び農家等からの病株の持ち込み診断依頼
平成8～9年

(3) 参考データ

表-1 野菜に発生した新病害

	病名	発生時期	病徴	留意点
a	トマト 根腐萎凋病	11月～ 翌年6月	萎凋症状を呈し、維管束褐変は茎基部のみに見られる。 根、茎基部は外見のみ褐変壊死する。10～20℃の低温性病害である。	低温性の病害で、冬～春にかけて発生しやすい。発生地では、連作を避け土壌消毒を行い抵抗性台木を用いる。
b	ハクサイ輪紋病	栽培全期間	外葉は、黒色褐点型病斑で黒斑病等に似ている。 多湿条件下では葉、中肋部に褐色、長楕円形の輪紋状の病斑となる。	外葉は、黒斑病、白斑病等と似ているため判断しにくく、結球内部にも発生するため、市場出荷後に気づくことがあるので、生育期における白斑病防除剤で同時防除を行う。種子伝染するので、種子消毒を行い播種する。
c	シソ斑点病	栽培全期間	ハローを伴った周縁不明瞭な褐色～淡褐色の小斑点を生じた後、拡大する。また、茎の地際部が黒変しくびれた後倒伏、枯死する。	梅雨、秋雨時期に発生が多く一度発生すると急速に蔓延する。一見無病徴でも市場出荷中に発病することもあり、被害は大きい。収穫後、低温で保冷することにより被害を低減できる。
d	モロヘイヤ 黒星病	栽培全期間	葉に不正多角形の暗褐色斑点、茎に紡錘形の暗褐色斑点を呈する。 花、葉、茎に黄褐色～褐色、淡灰褐色のかびが密生する。	梅雨、秋雨時期に発生が多く、一度発生すると急速に蔓延する。ハウス内の換気に気をつけ多湿にならないようにする。
e	モロヘイヤ 葉ぶくれ病	栽培全期間	はじめ葉の裏面に不整形の隆起を生じ拡大、融合後葉身が表側から裏側に向けて膨れる。 症状が進展すると、表面が褐変し、白色粘状物を生じる。	多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の換気に気をつけ多湿にならないようにする。

(4) 発表論文等

なし